

# NEWS CAST

August 2007  
No. 90

日本がん疫学研究会

## 庶務幹事 20年、 会員 30年を振り返って

田島和雄（愛知県がんセンター研究所）



原稿執筆を依頼されて庶務幹事としての20年間を振り返りましたが、恥ずかしながら何も貢献していなかったことがわかりました。そこで日本がん疫学研究会の30年間を振り返りながら所感を述べ、

若き会員の方々に参考にしていただければ有難いと思います。

日本がん疫学研究会は1977年、1979年、1980年と富永祐民先生、青木国雄先生、平山雄先生たちが中心となって記述疫学的研究報告を中心にワークショップ形式で始まったと記憶している。そして、1981年に埼玉がんセンターの久保利男先生が世話人となり、「がん研究：疫学と病理学の接近」が開催されたのを機に第4回日本がん疫学研究会となった。その時に会規を作成し、年会費も3,000円と定め、以降、全国の疫学・臨床研究者が世話人となり毎年開催されてきた。愛知県がんセンター研究所の疫学部（現、疫学・予防部）は行きがかりで事務局を務めることになった。当時から一般の学会とは異なりテーマを絞り込んだワークショップ、あるいはシンポジウム形式が取られ、がん疫学研究の問題点を極めて効率よく討議してきた。また、研究会の内容は例外を除いて篠原出版株式会社の厚意により雑誌「がんの臨床」の別集や特集として継続的に報告してきた。それらは日本のがん疫学研究の貴重な資料として活用されてきた。

私は1987年に富永先生から庶務幹事を引き継ぎ、一昨年は若井建志先生にバトンタッチしたものの、その秋に彼が名古屋大学に転勤したので、再度私が務めることになり、そして20年目にしてやっと松尾恵太郎先生に引継ぐことができた。本研究会の発足当初は会員が100名足らずであったが、私が引き継いだ頃には臨床家も含めて220名を超え、その後1998年の282名をピークに減少傾向を示してきた。庶務幹事の主な役割は会費の収集、代表幹事や学術会長と相談しながら幹事会や総

会の準備、幹事会の議事録作成、会員名簿の作成、さらに別集発刊の世話などであった。これからは松尾先生がIT技術を取り入れながら、遅れている事務局の機能向上を計ってくれるものと考えている。ニュースキャストの発刊は名古屋大学の予防医学教室の青木先生と佐々木隆一郎先生が尽力されてきたが、その負担を少しでも軽減するために編集幹事を定め、その後は定期的に発刊することになった。

私の記憶に留まっている主な事象をあげてみよう。第一に、若手会員による研究会の活性化を図るため代表幹事の定年制（60歳）を引いたことで、それには第一線の若い研究者が常に研究会をリードしていくようにという哲学が貫かれている。第二に、1991年における日本疫学会の誕生で、その時には本研究会を解散するか否かの賛否両論の討議が繰り返され、結局は日本疫学会と異なる「がんの疫学」に特化した集会として維持すべきであるという意見が強く、現在のように温存されることになった。第三に、研究会活動の活性化を図るため会費を発足後30年ぶりに3,000円から5,000円に引き上げたことである。

私は日本がん疫学研究会の卵が産み落とされる少し前、外科病理学を勉強するために愛知県がんセンターにやってきた。そして、1979年から富永先生に宿命の如く疫学部の研究員に誘われて、がんの疫学研究を開始することになった。時を同じくして、名古屋大学予防医学教室の大野良之先生たちの発案で東海地域の疫学研究者が集まり、疫学懇話会が開催されることになった。主に名古屋大学、名古屋市立大学、藤田保健衛生大学、愛知医科大学、岐阜大学、愛知県がんセンターなどの関連各教室・部が世話人を毎月交代しながら継続しており、今月ではや第221回目を迎えた。日本がん疫学研究会とともに疫学懇話会は、私が愛知県がんセンター研究所で疫学研究者として育っていく重要な土壌となった。

私の疫学研究は成人T細胞白血病の民族疫学研究から愛知県住民を対象とした病院疫学研究へ、そして日中韓三国を中心とした大東亜疫学研究へと進展してきました。図らずも2009年には第32回日本がん疫学研究会の会長を務めることになり、東京や福岡に続き、第三回がん予防大会「あいち」の開催に当たることになりました。愛知県がんセンター研究所疫学・予防部の若返った研究員たちと共に、上記の民族疫学、病院疫学、大東亜疫学を包括できるような研究会を開催できれば有難いと思っています。それはがん疫学研究会発足30年間の総括にもなると思いますから、会員皆様の大いなるご協力をお願い申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

**がん予防大会 in Tokyo 2007 を終えて  
第 30 回日本がん疫学研究会総会**

**第 30 回会長 山口直人**

6月12-13日の2日間にわたって表記大会が、日本がん予防学会、日本がん分子疫学研究会との共同開催という形で開催された。3学会・研究会合同というのは初めての試みであったが、192名にご参加いただき、無事に終えることができたのは、会員の先生方のご協力のおかげである。ここに謹んでお礼申し上げます。

がん対策推進基本計画が策定されて、がん死亡数20%減を目指した取り組みが本格化する中で、次世代に、より効果的ながん予防法を伝え残すための研究がますます重要となってきた。研究が日進月歩の今日、20年後のがん予防を思い描くことは容易なことではない。アスピリンが大腸がん予防に効果があるかもしれないという疫学研究が発表されて20余年。その後、大腸がん罹患率をターゲットとしたRCTでは有効性が確認されず、プラストレーションがたまっていたが、RCT後20年以上の追跡調査を行った研究結果が最近出され、投与開始後10年を経て効果が出るという報告であった。疫学にとって「次世代」は遠いことではないことが実感できる出来事である。20年後に大樹に育つ研究の芽を探す皆さんの努力に多少とも役立つプログラムを提供できたか、反省すべきことが多々あった大会でしたが、来年の古野先生、再来年の田島先生へとバトンをお渡しできれば望外の幸せです。みなさん、本当にありがとうございました。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

**がん予防大会 2008 / FUKUOKA (第一報)  
第 31 回日本がん疫学研究会総会**

第31回日本がん疫学研究会を、第15回日本がん予防学会および第9回日本がん分子疫学研究会と合同で下記のとおり開催いたします。来年のことで、日程の確保をお願い申し上げます。

開催期間	2008年5月22日(木)~23(金)
開催場所	九州大学医学部百年講堂(福岡市)

- 第15回 日本がん予防学会会長 古野純典
- 第9回 日本がん分子疫学研究会会長 中別府雄作
- 第31回 日本がん疫学研究会会長 古野純典

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

**若手研究者の紹介**



**栗木清典**

**愛知県がんセンター研究所  
(疫学・予防部/腫瘍病理学部)**

はじめに、本稿執筆の機会をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。私は、現在、財団法人がん研究振興財団リサーチ・レジデントとして、愛知県がんセンター研究所で研究に従事しています。名古屋市立大学大学院医学研究科(博士課程)、日本学術振興会特別研究員(JSPS)を経て現在に至っているので、このコーナーの趣旨と合致していないかもしれませんが、がん罹患リスクと脂肪酸の関連に興味を深まりますと幸いです。

**< 脂肪酸の新しい測定方法の開発 >**

大学院在学中から、厚生(労働)省がん研究助成金「がん一次予防のための生活習慣への効果的な介入に関する研究」において、「大腸腫瘍摘除後の腫



瘍予防のための食生活介入試験」に参画している。参加者を無作為割付して、実験群には、総脂肪、n-6 多価不飽和脂肪酸(PUFAs)の摂取を抑制し、青身魚に多いドコサヘキサエン酸(DHA)などの n-3 高度不飽和脂肪酸(HUFAs)などの摂取を勧奨した。対照群は、総脂肪の摂取を抑制した(文献 1)。現在解析中である。コンプライアンスマーカーとして、血漿、赤血球膜、S 状結腸の粘膜中の脂肪酸レベルを測定しているが、非常に煩雑で、手間を要する手作業のため遅々としている。脂肪酸測定は、疫学研究で適用するには困難が多いと感じていた。

そのような折、栄養相談(面接)の担当者から、参加者の何人かは熱心に継続しているが、面接、食事調査、血清脂質の結果に整合性がみられないと相談を受けた。即座に血漿中の脂肪酸レベルを測定し、その結果に基づいて再度面接を行ったところ、当該の参加者らは、介入内容を維持できていないが、私どもが親身に食事指導するので食事調査は良い答えを記入したと返事をされた。この時、適切な生体指標を用いて食事調査を行うことの重要性を実感した。脂肪酸の測定は、1970 年代から今日まで革新的な技術開発がなかったため、微量、簡便、迅速、安価、高精度に多くの検体の脂肪酸濃度を測定する新規方法の開発は苦心した(文献 2)。特許申請を含めて JSPS の 3 年間に要した。

#### < 研究成果 >

疫学研究で有用な生体試料は血液である。血漿中の脂肪酸レベルは、絶対濃度(mg/dL)を評価できるが、高脂血症、肝機能障害などの疾病に伴う中性脂肪や遊離脂肪酸の変化、また、がんなどの疾病に伴う食欲低下の影響を受ける。脂肪酸摂取との関連は、1週間程度と短期間である。一方、赤血球(約4ヶ月の寿命)は、総脂酸を占める相対濃度(%)による評価となるが、少なくとも3ヶ月の習慣的な食生活を反映している。

そこで、私どもは、当センターの大規模病院疫学研究(HERPACC)において、赤血球膜中の脂肪酸レベルとがん罹患リスクとの関連を検討した。大腸がんの症例・対照研究の場合、魚、n-3 HUFAs 摂取との関連はみられなかったが、赤血球膜中の PUFAs(n-6 PUFAs、n-3 HUFAs などの総和)、DHA の低レベルに対する高レベルのオッズ比は、0.15、0.36 と有意に低く、飽和脂肪酸(SFAs)、SFAs/PUFAs の比では 8.20、9.45 と有意に高かった(文献 3)。乳がんの場合、魚摂取では 0.59 と低い傾向、n-3 HUFAs 摂取では 0.51 と有意に低く、さらに、赤血球膜中の PUFAs、DHA では 0.09、0.06 と有意に低く、SFAs、PUFAs/SFAs では 12.29、12.56 と有意に高かった(文献 4)。欧米化した食生活習慣、特に、脂肪摂取の増加

およびアンバランスな脂肪酸摂取によって増加していると考えられている大腸や乳房のがん罹患リスクと赤血球膜中の脂肪酸レベルとの関連には一貫性があることを明らかにした。

#### < 今後の抱負 >

DHA は抗炎症作用や抗腫瘍作用があり、SFAs はがん細胞の増殖促進に関与していると考えられるので、大腸や乳房だけでなく他の臓器のがんと関連も同様に検討する。そして、第 3 次対がん総合戦略におけるがんの有効な予防方法の確立に資することができるよう研究に勤しんでおります。



測定室にて

#### < 文献 >

1. Tokudome S, Yokoyama Y, Kamiya T, Seno K, Okuyama H, Kuriki K, Cheng J, Nakamura T, Fujii T, Ichikawa H, Itoh M. Rationale and study design of dietary intervention in patients polypectomized for tumors of the colorectum. *Jpn J Clin Oncol* 2002;32:550-3.
2. Kuriki K, Tajima K, Tokudome S. Accelerated solvent extraction for quantitative measurement of fatty acids in plasma and erythrocytes. *Lipids* 2006;41:605-14.
3. Kuriki K, Wakai K, Hirose K, Matsuo K, Ito H, Suzuki T, Saito T, Kanemitsu Y, Hirai T, Kato T, Tatematsu M, Tajima K. Risk of colorectal cancer is linked to erythrocyte compositions of fatty acids as biomarkers for dietary intakes of fish, fat, and fatty acids. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev* 2006;15:1791-8.
4. Kuriki K, Hirose K, Wakai K, Matsuo K, Ito H, Suzuki T, Hiraki A, Saito T, Iwata H, Tatematsu M, Tajima K. Breast cancer risk and erythrocyte compositions of n-3 highly unsaturated fatty acids in Japanese. *Int J Cancer* 2007;121:377-85.

## ☆☆☆☆ コホート便り (最終回) ☆☆☆☆☆

## 多目的コホート研究 (JPHC Study)

井上真奈美

国立がんセンターがん予防・検診研究センター予防研究部

厚生労働省研究班による多目的コホート研究 (Japan Public Health Center-based prospective Study: JPHC Study) は、全国 11 保健所管轄地域に住民登録していた約 14 万人を対象とした大規模コホート研究です。「がん、循環器疾患、糖尿病、自殺など、国民の生活の質の低下や平均寿命前の死亡に至らしめる様々な疾病の危険・予防要因を明らかにすることにより、我が国の生活習慣病対策を推進するための科学的根拠を得ること」を目的として、様々な地域の住民から構成された日本人大規模集団の追跡調査を行っています。この研究は、その名の通り、特定の疾病をターゲットにした研究ではなく、様々な要因と様々な疾病との関連を検証できるという「多目的用途」であることを特徴としています。大きくは 1990 年に開始したコホート I 群 (岩手県二戸、秋田県横手、長野県佐久、沖縄県中部、東京都葛飾区の各保健所管轄地域) (40-59 歳) と 1993 年に開始したコホート II 群 (茨城県水戸、新潟県長岡、高知県中央東、長崎県上五島、沖縄県宮古、大阪府吹田の各保健所管轄地域と国立循環器病センター計画検診対象者群) (40-69 歳) から構成されています。

ベースライン時には、生活習慣等に関する自記式アンケートの他、一部の対象者からは健診結果データや血液試料を収集しています。その 5 年後には、同様に自記式アンケートおよび健診結果データと血液試料の収集、10 年後には自記式アンケートを実施しました。5 年後および 10 年後アンケートには詳細な食物摂取頻度調査を加え、研究報告を国際的に通用させるための素地を整えました。現在は主に、住民票照会による異動の把握や人口動態統計を利用した死因の把握、そして地元の医療機関や地域疾病登録などの協力により構築している登録システムによるがんおよび循環器疾患 (脳卒中・心筋梗塞) 罹患の把握、自己申告による一部の疾病罹患の把握など、追跡情報の収集をメインに研究を運営しています。現在の追跡不能者は 0.5% 程度、がん登録における DCN は 10%、DCO は 5% 程度と、科学的に妥当な研究精度を維持しています。

1989 年度の研究開始当初は、国立がんセンターと 5 保健所との共同研究として発足していましたが、1992 年度には国立循環器病センターと 6 保健所が加わり、現在の研究体制となりました。2007 年現在は、厚生労働省がん研究助成金による指定研究班「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの

構築に関する研究」(主任研究者は津金昌一郎国立がんセンターがん予防・検診研究センター予防研究部長) として、国立がんセンターおよび国立循環器病センター、保健所、大学、研究所等との共同研究として実施されています。

研究開始から 10 年間は、Exposure 情報の収集がメインに行われ、Outcome 数の不足もあり、いわゆる Association 研究はほとんど行われず、妥当性研究が主な研究成果でした。10 年を越えた頃から死亡やがん罹患をエンドポイントとした Association 研究が論文化できるようになり、この数年は、がんより発症数の少ない循環器疾患についても論文化を進められるようになりました。また、本研究は血液試料も収集していることから、主要部位がんを中心に、血液試料を利用したコホート内症例対照研究を積極的に行い、順次論文化を進めています。さらに、論文化された成果の増加に伴い、最近では国際的にも日本を代表する大規模コホート研究の一つとして認知されるようになり、ハーバード大学が中心に実施している欧米の大規模コホート研究の統合解析プロジェクト (Pooling Project of Prospective Studies of Diet and Cancer) へ参加しています。

公的資金による研究ですので、国民への情報公開は必須であり、ホームページなどを利用した研究成果の公表を積極的に進めています。専門誌に報告した研究成果については、希望者へのリサーチニュースの配信と同時にホームページで研究成果の概要を公開しています (<http://epi.ncc.go.jp/jphc/>)。一口に情報公開といっても、ホームページを常に更新していくような情報公開は、研究者が解析や論文執筆の傍らに行うのは非常に負担の大きい作業となります。多目的コホート研究では、研究者とは別に、これを専門に行う者がホームページの更新など情報公開に伴う諸作業にあたっています。

ところで、多目的コホート研究の対象者が該当年齢層の全住民であり、かつ前向き追跡研究であるため、この研究から生まれる研究成果への期待と責任が大きい一方で、研究開始当初より、大規模であり、長期間追跡であり、かつ対象地域が広範囲であることや様々な立場にある多くの研究協力者が関連することから生じる様々な運営上の問題点を抱えてはそれを乗り切りながら今日に至っています。さらに近年では個人情報保護に関する法律制定などにより、研究に関連する諸資料の利用に必要な手続きが煩雑で負担も大きくなってきましたが、幸い、何とかご理解を得ながら研究を存続させています。研究者のみならず、対象者の方々、研究フィールドの維持にあたられている保健所や市町村、医療機関の関係者の方々など、多くの方々の協力があるからこそこのような大規模研究が実現できているのであり、これまでの関係者の尽力を無駄にしないよう、今後とも高い研究の質を維持していきたいと考えております。



## 平成19年度日本がん疫学研究会幹事会議事録 要 旨

日 時: 2007年7月 11日

場 所: 国立がんセンター管理棟 1階 第一会議室

出席者: 森、山口、祖父江、津金、井上、味木、溝上、岡本、永田、浜島信之、菊地、田島、渡邊、津熊、田中英夫、竹下、今井、本荘、秋葉、嶽崎(以上幹事20名)

事務局: 松尾(特別参加)、山内

欠席者: 岸、辻、坪野、濱島ちさと、若井、玉腰、石川、中地、清水、古野、田中恵太郎

### 【議事録要旨】

1. 庶務報告(庶務担当幹事: 田島)
  - 1) 会員数: 2007年6月15日現在で会員数は226人、うち海外顧問2人、賛助会員1社であった。1990年以降会員数は減少傾向にある。
  - 2) NEWS CASTの発行: 主編集者井上幹事、副編集者溝上幹事によりNo.86からNo.89までの4号が発刊された。
  - 3) 会計報告: 平成18年度の会計収支報告が行われ、津金監事からの監査報告後、承認された。続いて平成20年度予算案についても承認された(総会にて承認)。
2. 役員等の一部改選(代表幹事: 山口)
  - 1) 特別会員の推薦: 今回の任期満了に伴い改選対象の岸幹事と任期中で非改選の田島幹事が推薦された(総会にて承認)。
  - 2) 幹事の改選: 2007年6月30日付けで任期満了となる18名と1名の特別会員への推薦に伴う補填を含め合計19名の幹事選出選挙が行われた。うち岸、田島両幹事の特別会員への推薦、渡邊幹事の事前辞退申入れがあり、選挙の結果15名が再選され、新たに4名(松尾恵太郎、小笹晃太郎、鈴木貞夫、西野善一)が新幹事として選出された(総会にて承認)。
  - 3) 監事の依嘱: 任期満了となった津金監事は本人の了承のもと再度依嘱された。
  - 4) NEWS CAST 編集者: 井上幹事の任期が終了し、新編集者として永田幹事が推薦され承認された。
  - 5) 田島幹事に代わり庶務幹事は松尾恵太郎新幹事が推薦、承認された。
3. 次々年度の日本がん疫学研究会の会長選出(代表幹事: 山口)
 

次々年度の研究会(平成21年度に開催予定の第32回)の会長として田島幹事が推薦され承認された。なお、開催については他の学会・研究会と合同開催等を含め7月中・下旬頃で検討中である。
4. 次年度の日本がん疫学研究会の開催(次期会長古野幹事の代理: 山口代表幹事)
 

第31回の学術総会は古野会長が第15回日本がん

予防学会の会長も兼ね、第9回日本がん分子疫学研究会(九州大学生体防御医学研究所: 中別府雄作会長)と3会合同で平成20年5月22日(木)から23日(金)に福岡市(九州大学医学部百年講堂)にてがん予防大会として開催予定しているとの説明があった。

### 5. その他

- 1) 年会費を平成18年度より値上げし、繰越金も増えているので予算には計上されていないがもっと若手の研究者を対象に何か特別企画など呼びかけ執行してはどの意見が出された。加えてもっと若手会員を増やす努力を期待したい。
- 2) 本研究会のホームページやメーリングリストを作成してほしいとの意見も出された。
- 3) 総務省の条例が改正され、将来的に疫学やコホート研究などに必要な個人情報の収集が困難になるものと予想される。本研究会からも何らかの形で要望書を出してはどうかなどの提案があったが、まずは日本疫学会の要望書に準ずることになった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 第66回日本癌学会学術総会のご案内

大会テーマ	連携—がんの着実な減少に向けて—
大会長	鶴尾 隆 (財団法人癌研究会 癌化学療法センター所長)
主催	第66回日本癌学会学術総会組織委員会
開催期間	2007年10月3日(水)～5日(金)
開催場所	パシフィコ横浜(横浜市西区)
参加費	特別講演 「The Role of Nuclear Receptors in Atopic Diseases」他 ●特別講演関連シンポジウム 「核内レセプターの機能と治療への応用」他 ●JCA-AACR-SIC Joint Symposium 「Global Trends in Molecular Cancer Therapeutics」 ●International Sessions(指定・公募演題) ●腫瘍別6シンポジウム (日本がん治療認定医機構承認: 日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、日本癌学会 共催) ●連携シンポジウム(医工連携・産官学連携) ●がん専門薬剤師になるためのレクチャーシンポジウム(日本病院薬剤師会共催) ●Cancer Science100周年記念企画 ●English Workshop
ホームページ	<a href="http://www2.convention.jp/jca2007/">http://www2.convention.jp/jca2007/</a>
事務局	日本コンベンションサービス株式会社 電話 03-3508-1214 FAX 03-3508-1302

## 第18回日本疫学会学術総会の御案内

テーマ：地球時代の疫学に向かって  
学会長：丸井 英二(順天堂大学医学部 教授)  
日程：2008年1月25日(金)、26日(土)  
会場：学術総合センター 一橋記念講堂  
東京都千代田区一ツ橋2-1-2

### 【プログラムの概要】(予定)

#### 2008年1月25日(金)

特別講演 「脳科学から疫学へのメッセージ」

小泉 英明 (日立製作所)

シンポジウム「ゲノム疫学の現状と未来:その技術と倫理」

中村 祐輔 (東京大学医科学研究所)

田島 和雄 (愛知県がんセンター研究所)

米本 昌平 (東京大学先端科学技術センター)

玉腰 暁子 (司会:国立長寿医療センター)

#### 2008年1月26日(土)

特別講演 「構造主義生物学から見た疫学」

池田 清彦 (早稲田大学国際教養学部)

シンポジウム「ふたたび感染症の疫学へ」

倉田 毅 (富山県衛生研究所)

喜田 宏 (北海道大学大学院獣医学研究科)

木原 正博 (京都大学医学系研究科)

森 亨 (司会:国立感染症研究所)

### 【参加申し込み】

ご案内に同封する振込用紙に会員番号記載の上、お申し込みください。参加費:一般8,000円、学生4,000円  
当日参加費:一般10,000円、学生5,000円  
振込締切日:2008年1月11日(金)

### 【演題募集要項】

#### 1) 演題申込み

筆頭発表者は日本疫学会の会員で、本年度までの年会費を完納している者に限ります。

#### 2) 申込み手順

1. 抄録原稿とそのコピー1枚を学術総会事務局宛に郵送して下さい。
2. 原稿を郵送した上で、Eメールにて演題名と発表者全員の氏名およびフリガナをプレインテキストにて [jea18th@med.juntendo.ac.jp](mailto:jea18th@med.juntendo.ac.jp) 宛にお送り下さい。添付は使用しないで下さい。メールの題名に「演題申込(筆頭発表者氏名及び会員番号)」を付けて下さい。

#### 3) 抄録原稿受付

2007年9月1日(土)から 10月19日(金)必着

#### 4) 送付先

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1  
順天堂大学医学部公衆衛生学教室内  
第18回日本疫学会学術総会事務局

### 【懇親会】

日程：2008年1月25日(金)18:00~20:00

会場：学士会館 神田本館

会費：7,500円

申し込み方法：振込用紙通信欄「懇親会」にチェックし、総会参加申し込みと一緒に参加費をお振込みください。

### 【関連行事】

#### 第15回疫学セミナー

テーマ：「環境疫学の方法と実践」

大気汚染疫学で用いられるデザインと解析手法

佐藤 俊哉・大森 崇・山崎 新(京都大学)

環境疫学研究の実践

新田 裕史(国立環境研究所)

日時：2008年1月24日(木) 14:30~17:30

会場：順天堂大学医学部9号館2階8番教室

定員：100名(定員になり次第締切)

参加費：2,000円(当日参加費3,000円)

申込方法：振込用紙通信欄「疫学セミナー」にチェックし、総会参加申し込みと一緒に参加費を振込む。

#### 疫学の未来を語る若手の集い

日程：2008年1月24日(木)18:00~20:00

会場：順天堂大学医学部9号館2階8番教室

参加費：無料

### 【問い合わせ先】

第18回日本疫学会学術総会運営事務局 〒113-8421  
東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部公衆衛生学教室内  
TEL&FAX：03-3818-2535

Eメール：[jea18th@med.juntendo.ac.jp](mailto:jea18th@med.juntendo.ac.jp)

ホームページ：<http://jea18.umin.ne.jp>

### ★編集後記★

NEWSCAST90号をお届けします。これからの1年は国立国際医療センターの溝上と岐阜大学の永田が編集を担当します。よろしくお願ひいたします。

7月に開催されたがん疫学研究会総会は30回目を迎えました。今号は、会長を務められた山口先生にがん予防大会の様子について、また庶務幹事として長い間お世話くださった田島先生に研究会の歴史についてご寄稿いただきました。コホート便りの最終回では、井上先生にJPHC Studyについてご紹介いただきました。若手研究者のコーナーには栗木先生の登場です。お忙しい中、ご寄稿くださった先生方にお礼を申し上げます。(溝上)

本号から編集を担当する岐阜大学の永田です。溝上先生の見習いとしてスタートしたばかりです。よろしくお願ひ申し上げます。今回、まずは本研究会の歴史から学ぶことが出来ました。(永田)